

## 翻刻・当流増補番匠童

雲 英 末 雄

京都俳壇は、天和・貞享の沈滞期を経て元禄初年に至り、にわかに活況を呈し、主要な点者たちは俳諧撰集をつぎつぎに刊行してゆく。

そうした撰集の刊行と同時に、歳時記や一般大衆向けの作法書類刊行の活発化がみられるのも、この時期の顕著な特色である。かような例を挙げれば、貞享五年（元禄元）には、『<sup>俳諧</sup>五節句』（半紙本一冊。順也著。京都、蘭秀軒刊）『日本歳時記』（半紙本七冊。貝原好古著損軒刪補。三月日新堂刊）、元禄二年には、『<sup>俳諧</sup>談諧番匠童』（小本一冊。和及著。京都、新井弥兵衛刊）、元禄三年には、『当流<sup>俳諧</sup>談諧番匠童大全』（横本一冊。和及著。『<sup>俳諧</sup>談諧柱立』（小本一冊。如泉著。四月、中川六兵衛、久保三良右衛門、

田中庄兵衛刊）『<sup>俳諧</sup>誹道手明松』（中本一冊。貞木著。十月、京都中村孫兵衛、江戸西村理右衛門刊）、元禄四年には、『<sup>俳諧</sup>初学祇園拾遺物語』（半紙本二冊。松春著。一月、江戸西村半兵衛、京都西村市右衛門・坂上甚四郎刊）『<sup>俳諧</sup>流増補番匠童』（小本一冊。和及著。本翻刻の底本。後述）『<sup>俳諧</sup>京羽二重』（半紙本四冊。林鴻著。九月、京井筒屋庄兵衛刊）、元禄五年には、『<sup>俳諧</sup>誹諧小からかさ』（小本一冊。松春著。正月、江戸西村半兵衛、京都西村市郎右衛門・坂上

甚四郎刊）『<sup>俳諧</sup>重宝記すり火うち』（横一冊。如泉著。京都秋田屋五郎兵衛刊）等、かなりな点数のものがみられる。

こうした作法書の中で、とりわけ流布されたと思われるのが、元禄二年初版刊行の『番匠童』で、幾度となく刷をかさね、版を改めて刊行されており、当時の俳諧師や俳諧愛好家に広く利用されたものと思われる。以下はその諸本の調査報告、作者の問題、ならびに改訂の決定版と思われる元禄四年版の翻刻である。

### 諸 本

管見のAからGまでの諸本を、①大きさ②表紙③題簽④序⑤目録⑥刊記⑦叙⑧丁付⑨備考の順にしたがって解説してゆきたい。

A 元禄二年版本（初版） 国会図書館蔵本

① 小本一冊。一一・二×七・八厘。

② 茶色履表紙。元表紙欠。

③ 後補。左肩無辺「談諧番匠童」（墨書）。

④真珠庵（如泉）の序がある。「詠諧番匠童序 凡名公之於詠諧

諧也。陰如舞女走竿活如市兒弄丸自然写其風景而不落權設策白也。貫之躬恒之詠杜甫太白之作亦是發于性情而已論其雅境則詠諧何有理趣之別乎哉 元

禄二己巳春初旬真珠庵主識」。

⑤〇詠諧番匠童目錄

一前句付の仕様

一表八句の事

一発句切字の事

一当流発句の事

一面八句ニ嫌事

一裏月花の有所の事

一哥仙の仕様

一四十四の仕様

一恋の詞并神祇釈教述懷哀傷

一去り嫌の事

一句去りの事

一人倫居所体用

一山類水辺体用

一夜分の詞

〇鈔屑目錄

一当流四季の詞

一叙

目錄終

⑥「当流四季の詞」の卷末「四季 廿二」裏に「元禄二己巳年三

月日／洛陽書林新井弥兵衛版」とある。

⑦貞享四年の清白翁（我黒）の叙がある。「何氏の何といへる人か口にきゝ耳にいふ事をひとつ／＼えり出してならへみるにをのつから四季の詞と成ぬ初心のためにいみち尤／＼馬に何やら虫のとつて千里を行にたやすからむとつみてに梓にちりはめて人にもひけらかしけなりからせよといへは物にもとあり末ありことはに始あり終ありとてやかてうなつきぬ貞享よつのとし清白翁李洞の軒におるてのふる物ならし」。

⑧「番匠 序」「番匠 一」「番匠 一」（「番匠 廿一終」）「四季 一」（「四季 廿二」）「四季 叙」 全五十六丁。

B 元禄二年改訂版本 天理図書館綿屋文庫本<sup>67 29</sup>

本書は、Aの本文を部分的に入木訂正したものである。

①小本一冊。一一・一×八・一櫃。

②焦茶色布目文表紙。

③欠。左肩にあとあり。

④Aに同じ。

⑤Aに同じ。

⑥Aに同じ。

⑦Aに同じ。

⑧ Aに同じ。

⑨ Aの本文を部分的に入木訂正したもの。訂正箇所は、別表参照。

なお綿屋文庫<sup>671</sup> 本も同版。

### C 元禄二年別版本

本書はA Bの別版で、Bをかぶせ彫りにしたもの。(a)(b)二種がある。

(a) 天理図書館綿屋文庫本<sup>672</sup>

① 小本一冊。一一・三×八・一匁。

② 改装表紙。縹色小菊文。

③ なし。

④ Aに同じ。

⑤ Aに同じ。

⑥ Aに同じ。

⑦ Aに同じ。

⑧ Aに同じ。

⑨ Bのかぶせ彫り。Bと本文はほぼ同じだが、小異がある。別表

参照。

(b) 東京大学総合図書館酒竹文庫本<sup>2729</sup>

① 小本一冊。一一・三×七・八匁。

② 改装表紙。栗色表紙。

③ なし。

④ なし。

⑤ Aに同じ。

⑥ 「四季廿二丁のところに「卅二丁」が乱丁になっており、そこに「元禄二己巳年三月日／洛陽書林（以下板木削除されてなし）」とある。

⑦ Aに同じ。

⑧ Aに同じ。

⑨ ⑥で「新井弥兵衛版」と書肆名を削除している。また序のみなく、全五十四丁。他は(a)に同じ。

### D 元禄三年版本I

本書は、Bを横本に仕立てかえたもので、「当流はなひ大全」を付合し、(a)三書肆本(b)二書肆本(c)一書肆本の三種がある。

(a) 三書肆本 聖心女子大図書館本

① 横本一冊。一〇・六×一六・七匁。

② 縹色表紙。

③ 題簽欠。左肩に「はいかい□□□」と墨書。

④ 「談諧番匠童序」。文はAに同じ。「元禄三<sup>庚</sup>春初旬／真珠庵主識」。

⑤ 当流俳諧番匠童大全

目録

一序

一前句付の事

一面八句の事

一当流発句の事

一面八句に嫌事

一裏表 月花の有所の事

一哥仙の仕様

一四十四の仕様

一恋の詞 井神祇 教無常述懐

一去嫌の事 句去の事

一発句切字の事 賦物の事

一和漢の事 句数の事

一人倫の分 并居所体用山類水辺

一夜分の詞

一当流四季の詞

一はなひ大全 御傘の正意

一草木の異名 并引哥

⑥ 卷末に「元禄参塾／庚午初春吉辰／江戸日本橋南武丁目村上源兵衛  
／大坂大手先谷町西へ入町菊屋勘四郎／書林  
高麗橋巻丁目藤屋弥兵衛」

(図1参照)。

⑦ なし。

⑧ 「番匠童 〇一」(「番匠童 〇廿六」)「番匠童 廿七」(「番匠童 廿九」)「丁付 又廿六」「はなひ 〇廿七」(「はなひ

なひ 終〇九十九」。百丁表に刊記。計百三丁半。

⑨ 二丁裏に「……是を増補してひろひあつめたる縁にまかせ番匠童と名付且又はなひ大全に付合し早ぬ」とある。また二十六丁裏に「四季詞終」とあり、ここまでがABC本のすべてにあたる。ただし「発句切字の事 賦物の事」は順序を変え、内容も少し変わっており、次の「和漢の事 句数の事」の項目は新たに増補している。また二十七丁より二十九丁まで「百韻之法・歌仙之法」等三丁分も増補。(『俳諧柱立』を流用)さらに「当流はなひ大全」を付している。藤江峰夫氏の御教示によれば「当流はなひ大全」は、延宝三年并筒屋版『はなひ草綱目』に關係が深いという。刊記は卷末にあるが、二十九丁裏にも「元禄三庚午曆難波上町書林／孟夏吉祥日橋本勘四郎」とある。

(b) 二書肆本 京都大学願原文庫本 H1 33

① 横本一冊。一〇・七×一六・二 厘。

② 縹色表紙。

③ 後補。左肩双辺「俳諧番匠童」(墨書)。

④ (a) に同じ。

⑤ (a) に同じ。

⑥ 「元禄参塾／庚午初春吉辰／江戸日本橋南武丁目村上源兵衛／大坂大手先谷町西へ入町菊屋勘四郎／書林」(図2参照)。

⑦ なし。

⑧ (a) に同じ。

⑨刊記「高麗橋を丁目藤屋弥兵衛」を削除するが、それ以外は(a)に同じ。

(c) 一書肆本 天理図書館綿屋文庫<sup>わ68 2</sup>

①横本一冊。一〇・九×一六・五厘。

②栗色表紙。

③題簽欠。

④(a)に同じ。

⑤(a)に同じ。

⑥「元禄参翠／庚午初春吉辰／大坂大手先谷町西へ入町菊屋勘四郎」

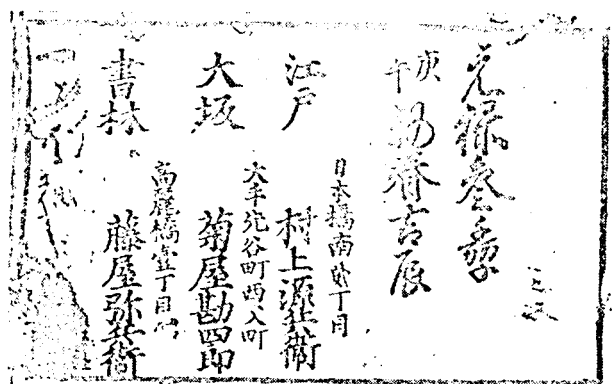


図1 元禄三年版本I (a)三書肆本刊記

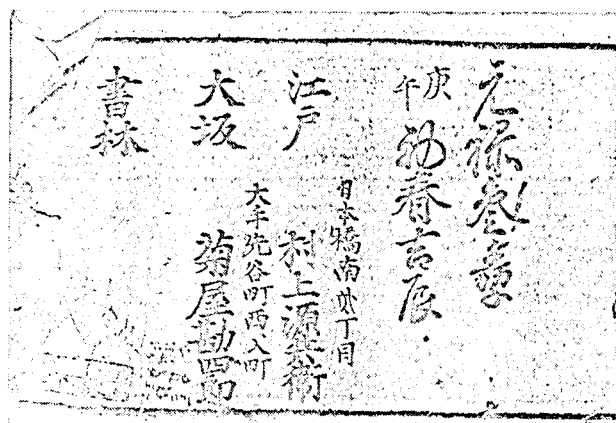


図2 元禄三年版本I (b)二書肆本刊記

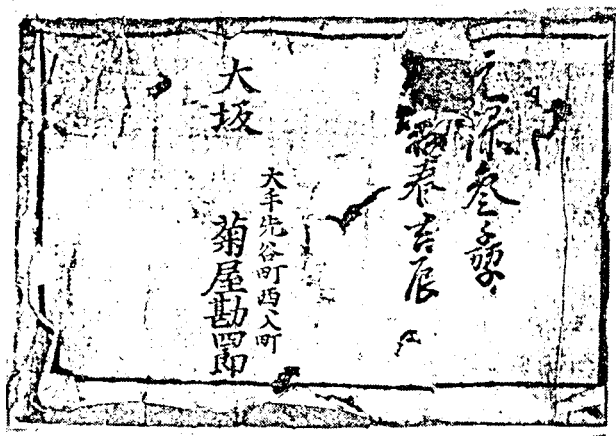


図3 元禄三年版本I (c)一書肆本刊記

(図3参照)

⑦なし。

⑧(a)に同じ。

⑨「江戸日本橋南貳丁目村上源兵衛／書林高麗橋を丁目藤屋弥兵衛」を削除するが、それ以外は(a)に同じ。ただし「丁付 又廿六」の二丁分「いろは付」を持たぬ天理綿屋文庫<sup>わ68 3</sup>本、東大酒竹文庫本<sup>2732</sup>本もある。

# E元禄三年版本II

東大竹谷文庫本印

Bを横本に仕立てかえたものでDと同じだが、「当流はなひ大全」を付合しないもの。

①横本一冊。一〇・八×一六・七厘。

②黄茶色表紙。

③左肩双辺「俳諧番匠わらハ大全」。

④Dに同じ。

⑤Dに同じ。

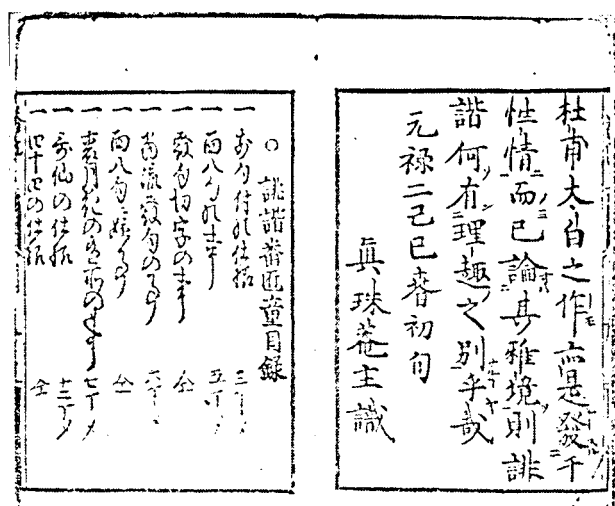


図 4-1 A元禄二年版本（初版）序・目録

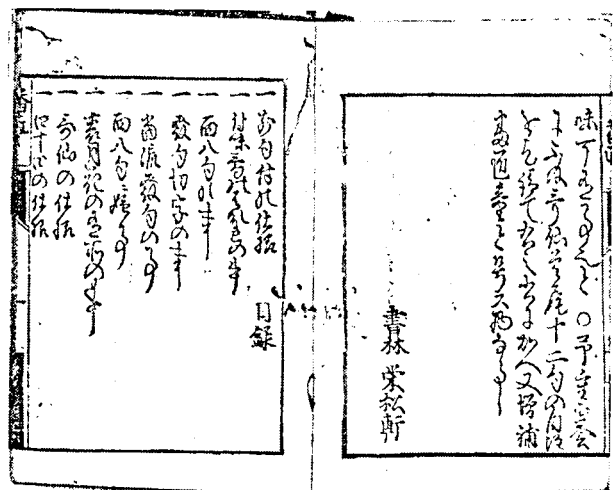


図 4-2 F元禄四年改訂版本 序・目録

⑥二十九丁裏に「元禄三<sup>庚</sup>午 曆難波上町書林／孟夏吉祥日 橋本勘四郎」。

⑦なし。

⑧「番匠童 〇一」～「番匠童 〇廿六」 「番匠童 廿七」～「番匠童 廿九」 全二十九丁。

「当流はなひ大全」を付合しないもの。もともとは二丁裏に「又はなひ大全に付合し早ぬ」とあり、「当流はなひ大全」と合冊になっていたものが、『番匠童』のみ、何らかの事情で単独に刊行されたもの。他に天理綿屋文庫<sup>68</sup> 4本、岩瀬文庫3128本等がある。

F元禄四年改訂版本 雲英架蔵本Bをさらに訂正し、「付味三句のはなれの事」の一項を増補したもの。

①小本一冊。一一・三×八・二厘。

②薄茶色布目文。

③左肩双辺「増補番匠童」。

④「書林 榮松軒」(序)

⑤一前句付の仕様 目録

一付味三句のはなれの事

一面八句の事(以下はAに同じ)

⑥「当流四季の詞」の巻末「四季 卅二」裏に「元禄四<sup>辛</sup>未 三

季 卅二」裏に「元禄四<sup>辛</sup>未 三

季 卅二」裏に「元禄四<sup>辛</sup>未 三

季 卅二」裏に「元禄四<sup>辛</sup>未 三

季 卅二」裏に「元禄四<sup>辛</sup>未 三

季 卅二」裏に「元禄四<sup>辛</sup>未 三

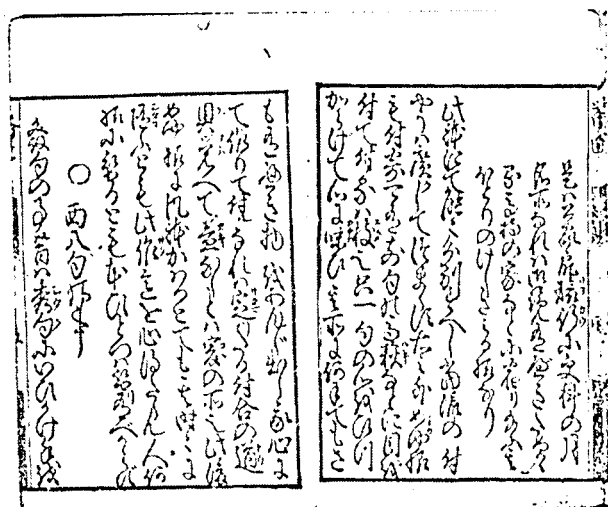


図 5-1 元禄二年版本（初版）四・五才

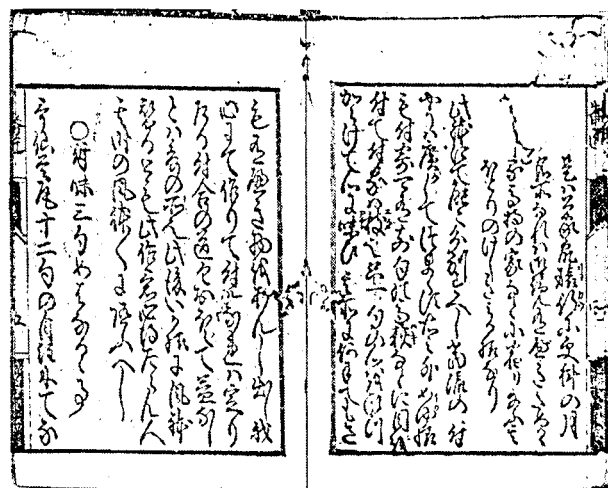


図 5-2 元禄四年改訂版本 四ウ・五才

月 日／洛陽書林新井弥兵衛版」とある。

⑦ 清白翁の叙はなく、かわりに「番匠童」三十二丁の箇所を二丁巻末に移している。

⑧ 「番匠 一」「番匠 序二」「番匠 三」「番匠 一」「番匠 二」

「番匠 五」「番匠又五」「番匠 又十二」「番匠 六」

「番匠 卅」「四季 一」「四季 卅二」「番匠 卅三

終」。序三丁、番匠童三十九丁、手斧屑三十二丁跋、一丁、計

七十五丁。

⑨ Aとのちがいは、Aの如泉序のかわりに榮松軒の序、目録の箇

所、最初の二行を削除して「一前句付の仕様／一付味三句のは

なれの事」の二行を入本。また「付味三句のはなれの事」の一

項八丁分を増補（図4、図5、図6参照）。なお文に異同がある。

p60の（注）参照。

G元禄四年版本 早大図書館本<sup>5</sup> 2778

Fを横本に仕立てかえて、さらに「当流はなひ大全」を付合した  
もの。DEとは別版。

① 横本一冊。一〇・九×一六・七厘。

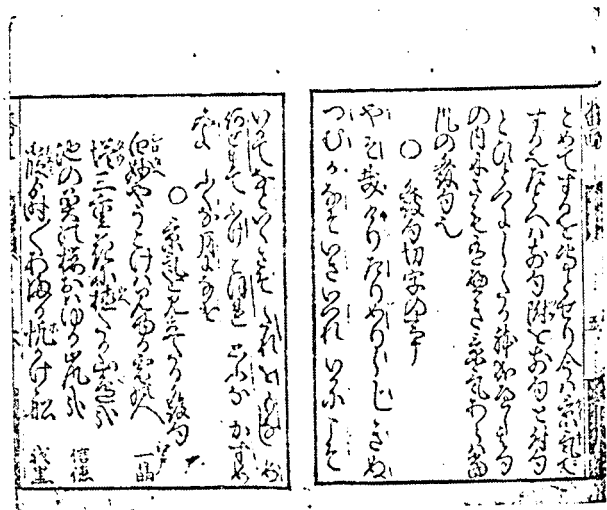


図6-1 元禄二年版本（初版）五ウ・六オ

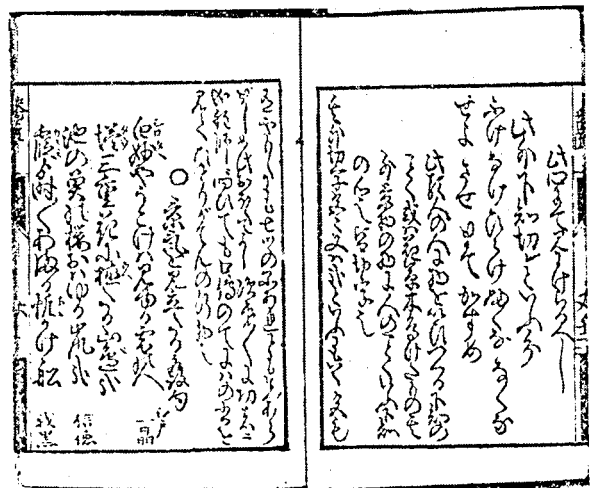


図6-2 元禄四年改訂版本又ノ十二ウ・六オ

- ②改装。渋引茶色表紙。
- ③後補。左肩双辺「誹諧番匠童全」（墨書）。
- ④「元禄四年未正月日／洛下書林榮松軒」（序）。序文の内容はFに同じ。
- ⑤増補番匠童目録
- ①前句付の事
- ②付味三句はなれの事
- ③面八句の事
- ④当流発句
- ⑤面八句に嫌事
- ⑥裏表月花有所の事
- ⑦哥仙の法
- ⑧四十四の法
- ⑨恋の詞并神祇釈教無常述懐
- ⑩去嫌の事付句去の事
- ⑪発句切字の事并賦物の事
- ⑫和漢の事并句数の事
- ⑬人倫ノ分并居所体用山類水辺



㊤夜分の詞

㊦四季の詞

㊧百韻懷紙書式

㊨俳諧漢和の法式付懷紙書式

㊩哥仙書法

㊪狂聯新式 ○はなひ大全

⑥「番匠童 廿九」裏に「元禄四年辛未正月吉日」、「はなひ終〇七十三」の卷末に「元禄四年辛未仲春吉日／武江書林 須原茂兵衛板行」とある。

⑦なし。

⑧「番匠童 〇一」(「番匠童 〇八」)「番匠童 〇又八」「番匠童 〇九」(「番匠童 〇廿六」)「番匠童 廿七」(「番匠童 廿九」)「はなひ 〇一」(「はなひ 終 〇七十三」)計百三丁。

⑨他に岩瀬文庫38106本、架蔵本等がある。

作者について

従来本書の著者を、『文庫連歌俳諧書目録』(昭和二九年)以下の目録類や諸氏の論文等にも真珠庵如泉としているが、この点を問題にする必要があろう。

F元禄四年改訂版本『当流増補番匠童』の柴松軒の序文が、この問題に対する答えを示してくれているので以下に引用してみよう。

翻刻・当流増補番匠童

此番匠童へ、本手斧くづとて当流の俳諧に用る所之四季の詞をあつめたる一冊、洛下芦川氏撰として真珠庵李洞軒の序跋を加へられしに、又露吹庵和及法師其門下之初心の輩に俳諧あらましの成法、古流・中古・当流の境を一句の前句に付合などして、書あたへられしを乞請て、両書ひとつに板行して番匠童と号す。俳道に入の門也とて初心懐中の重宝と成、世にひろくひろまりぬ。

右の序文によれば、『番匠童』ははじめ「手斧くづ」という四季の詞をあつめた季寄せ(芦川氏撰、真珠庵序、李洞軒跋。現『番匠童』で後半の「歌譜手斧屑」の部分。)があつたものに、露吹庵和及が、初心者のために俳諧の作法、古流・中古・当流の相違等を示したものの(「番匠童」を加えて、両書をひとつにして『番匠童』として刊行したものという。したがって本書の中心をなす「番匠童」の著者は、明らかに和及ということになる。これは『広益書籍目録』(元禄五年版)巻四「俳諧書」の箇所に、和及の著として『藤波集』『すゝめの森』『ひこばえ』『番匠童』『同増補』『水々きの岡』と書名が挙げられており、明白な傍証となろう。他に『俳諧枝葉集』(元禄十六年跋・正徳二年版)巻末の「俳書目録」に「一俳諧番匠童 和及述 一冊」とあり(加藤定彦氏御教示、さらに時代は下るが『俳諧袖鑑』(延享元年版)の「俳書目録」にも『俳諧新式』『同独り言』について「一増補番匠童 寸珍全部一冊 和及述」と明白に示されている。したがって著者は露吹庵和及とすべきであらう。

ところで「手斧くづ」の著者は芦川氏某ということになるが、姓の

『番匠童』諸本比較表

丁・表・裏・行	A 元禄二年版	B 元禄二年改訂版	C 元禄二年別版	F 元禄四年改訂版	DE 元禄三年版
2・オ・3	篇	編	編	編	編
3・ウ・1	宗因風	同左	同左	宗因風	宗因風
5・オ・4	爰	同左	爰	爰	爰
6・ウ・4	小松原	同左	同左	小松原 和及	小松原
7・オ・6	各	同左	同左	格	格
7・ウ・5	嫌ら	同左	嫌ら	嫌ら	嫌ら
8・オ・2	折合	折合	折合	折合	折合
8・ウ・3	多し	同左	多し	多し	多し
13・オ・3	法にあらず	法にあり	法にあり	法にあり	法にあり
13・ウ・5	薄浅	薄浅	薄浅	薄浅	薄浅
14・オ・1	嶋原	嶋原	嶋原	嶋原	嶋原
14・オ・2	泥町	同左	泥町	泥町	どろ町
14・オ・9	爰	禿	禿	禿	かぶろ
15・ウ・3	袖引	同左	同左	袖引	袖引
16・オ・2	祈んせは	同左	同左	祈りせは	いのるとせバ
17・オ・1	君を	同左	君き	君を	君を
17・オ・3	灰占	灰占	灰占	灰占	灰うら
17・ウ・3	捨て	同左	同左	捨て	捨て
17・ウ・7	妻にて	同左	同左	妻乞	妻にて
19・オ・7	三ツ垣	同左	同左	瑞垣	瑞離
20・オ・2	夏神楽卅代○	同左	同左	夏神楽○	夏神楽卅代
20・ウ・4	難波寺	同左	難波寺	難波寺	難波寺
20・ウ・5	清見寺	同左	同左	清見寺	清見寺
21・オ・2	九輪	同左	九輪	九輪	九輪
21・オ・4	廻廊 廊下○	廻廊 ○	廻廊 ○	廻廊 ○	廻廊
21・ウ・6	伝主	典主	典主	典主	典主
22・オ・2	閑学	碩学	碩学	碩学	碩学
22・ウ・7	化野	化野	化野	化野	化野
23・オ・2	心にて習多し	同左	同左	心にてなる句有	心にて習ひ多し
24・ウ・2	公家公郷哥人詩人	雲上人 殿上人 公家へ人倫ニならず	雲上人 殿上人 公家へ人倫ニならず	雲上人 殿上人	雲上人公家へ人倫 にあらず殿上人○
25・オ・9	と云詞の外何 も人倫也	同左	同左	と云詞人倫也	—
25・ウ・9	六親	同左	六親	六親 公家	六親
26・オ・8	通々	性	性	性	たゝみ
28・オ・5	閑伽	閑伽	閑伽	閑伽	閑伽
29・オ・1	清見寺	同左	同左	清見寺	—
29・オ・4	難波津	同左	同左	難波津	難波津
30・ウ・5	閑	同左	同左	閑	閑

○この表は、『番匠童』（一丁から三十丁まで）の諸本の異同を示したものである。「手斧屑」の方はさほど異同がないので省略した。またG元禄四年版本（横本）も比較の対象からはふいた。

みで名は不明である。たまたま管見の阿誰軒編『誹諧書籍目録』（元禄五年二月序）では「番匠童 一冊 柱立 共ニ 蘭斎作」とあり、芦川氏は蘭斎の号かとも考えられるが、蘭斎の姓は清水氏であり（「すり火うち」）、同一人物とは考えられない。それゆえ目下のところ手がかりは得られない。『書籍目録』で著者を蘭斎とするのは、何かの間違いであろう。ともあれ、『番匠童』の著者を如泉とする従来の考えは、新たに和及と改めねばならぬであろう。

著者和及について、以下簡略に述べてみたい。『誹家大系図』に常辰門として和及は「俗姓ハ三上氏或高村氏 露吹庵直唱法師ト号ス。洛西壬生村ニ隱栖シテ水青ノ句アリ。家書雀森 水ぐきのをか藤波集 ひこばえ等アリ。『当世百人一句』ノ一人。元禄五年壬申正月十八日寂。年四十四。辞世へ我としも四十四の花のあげ句かな」と誌されている。右の常辰門だが、常辰の撰集『纂纂集』『柁木葛』等には入集せず、むしろ常矩関係俳書に入集が多く常矩門とすべきであろう。和及は元禄初年に活躍する京俳壇の典型的な宗匠の一人で、その著『番匠童』や『雀の森』（元禄三年）『ひこばえ』（元禄四年）等は、元禄の蕉風以外の作法書俳論書として重視すべきところがある。

以下に翻刻する『番匠童』についても、初心者向けながら、その内容が当時流行していた景気付や心付について論及した箇所があり、十分検討を要するものがあるが、それについては紙幅も限られており、別稿を期したいと思う。

## 翻刻凡例

- 一、本翻刻は、『誹諧番匠童』（元禄二年版）を増補訂正した『当増補番匠童』（元禄四年版）の翻刻である。
- 一 底本の書誌は、諸本Fの項を参照されたい。また諸本との校異については図表をも参照されたい。
- 一 翻刻にあたっては、漢字および仮名の表記は出来る限り、現行のものに改めた。
- 一 仮名遣い、濁点等は、すべて原本に従った。
- 一 丁移りは「を」以て示し、丁数を数字、その表・裏をオ・ウで記した。なお丁数は底本の柱刻のものをそのまま用いた。
- 一 文中の○は、便宜上校訂者が付したものである。

○ 諸本の調査にあたり、公私の図書館・文庫の御便宜にあずかった。記して謝意を表します。

### □増補番匠童（題簽）

此番匠童ハ本手斧くつとて当流の誹諧に用る所之四季の詞をあつめたる一冊洛下芦川氏撰として真珠庵李洞軒の序跋を加へられしに又露吹庵和及法師其門下之初心の輩に誹諧あらましの成法古流中古当流の境を一句の前句に付合なとして書あたへられしを乞請て両書ひとつに板行して番匠童と号す是誹道に入の（1オ）門也とて初心懐中の重宝と成世にひろくひろまりぬさるによつて後ハ板木すりきえて文字も

見へわかす今更ニ板行をあらたむるつゐてニ右之手斧くつにも少々あやまりあり又其外ニも文字あやまり有よし告る人あれハそれをあらため又初心のたすけニ成程の事書添へ増補せまほしくおもひ」(1ウ)立和及法師にたより此おもむきをたのミ伝つるに○和法師曰尤のおもひ立に候しかし右之手斧くつ作者あり其あやまりをあらためん事予文才の力なし其身分としていかてあらためんや但シ予か書たる分ハ誹諧するほとの人知らさるといふ事なし是ハ誹とも諧ともわきまへぬ」(2オ)一文不知之連中を誹道に入るゝ助斗也此上にも其輩之便と成へき事ハ力の入る事にあらされハ辞するに不及只々前句への付味三句のはなれを知るため爰に哥仙の首尾拾二句つゝり置たるあり是に自注して三句のよしあし付味をわきまへさせんため書添へ増補可然候か○又先」(2ウ)書にも少しあやまり有所此書の命也故ハ初心の輩此番匠童を便として誹道に入て其あやまりを見出すほとの力出来給ハん事目出度候又ハ相友ニなしりあひ人にといい道を詮義有へき種とも可成間只其まゝに板行あらためらるへきか文字のあやまりなとハ能々吟」(3オ)味可有事也と○予重而誉に不及哥仙首尾十二句の自注を乞請て右之書に加へ又増補番匠童と号ス物ならし

## 書林榮松軒」(3ウ)

一前句付の仕様 目録  
一付味三句のはなれの事

一面八句の事  
一発句切字の事  
一当流発句の事  
一面八句ニ嫌事  
一裏月花の有所の事  
一哥仙の仕様  
一四十四の仕様  
一恋の詞并神祇釈教述懷哀傷  
一去り嫌の事  
一句去りの事  
一人倫居所体用  
一山類水辺体用  
一夜分の詞  
○斲屑目録  
一当流四季の詞  
一叙

「(番匠1オ)

目録終」(1ウ)

## 誹諧番匠童

凡誹諧ハ是和哥の一体にして昔日守武宗鑑<sup>ツツカミ</sup>などはしめ貞徳老人此道をあらため連哥新式になそらへ極置れしより誹諧世に盛になれり中比難波の梅翁是をやつし風体かるゝとして興ありしかハ宗因風とて普くもてはやし侍りぬ其後いろ／＼に風体替り詩」(番匠1オ)のことく声

によませ又ハ文字あまりなと様／＼替り侍れとも好ましからぬにや皆捨りぬ頃の当流と言ハやすらかにして姿ハ古代に似たれ共古しへの付合道具付又ハ四手付なとせずして其一句の心を味ひ景氣にてあしらひ或は心付にて各別の物を寄木に竹をつきたる様なれとも心ハひた／＼と付様にせり此体よろしきにや次第に世に広くなりぬ此後に又いかなるに替らんも知すしかあれと」(1ウ)時／＼に随ふ事万の道也されと初心の人志あれとも取付便なし毛吹草山の井なと其外古代の宗匠達初心の爲編置れし書多しといへとも時にあはされは見るに益なし爰に記す所ハ当流を望初学の人の爲になるへき要をあら／＼書侍りぬ是等も先書に有と云共当流に用ると用ひさるのへたてあれば其用所を書抜又ハあらたに書そへた／＼初心の爲にならんかしとおもふ所也たとへは九つの」(2オ)はしこ三つ四つあかりたる人ハ書を見るにも師にとふもたよりありこれハ其一つもあからざる人の手を取りてみち引のミあまねく人の見るへきにあらす此うへに四季のことは手斧屑とてありこれ当流に用る季ともおほくしてよろしければ是を増補してひろひあつめたる縁にまかせ番匠童と号す」(2ウ)

#### ○前句付の事

古流中比当流の付心のさかい一句の前句にて付わけぬ是になぞらへて他を知べし

前句

萩の露ちる馬持の家

付句

月にしも二人将棊をさしむかひ

是古代の付様也前の馬を将棊の馬にして付る也」(3オ)  
又中比宗因風の時ハ

其方のお手ハととへハ松の風

是も将棊の馬にして付たれとも将棊にいわて噤にて付萩の露ちるといふに松の風を余情にあしらひたり

又頃の景氣付といふハ

蕎麦空を焼らん煙ぼち／＼と

」(3ウ)

是旅体にして馬借シなんどの家に焼さうなけしきなり

又

大橋と小橋のあハひ霧とちて

是も景氣に淀にもせよ瀬田にもせよ馬持の家有さうな所也

又少功者にて付る時ハ

更科の月ゆへ公家を拝ミけり

」(4オ)

是ハ公家衆旅行に更科の月名所なれハ御覽有べきためかゝる

馬持の家なとに宿り給ふ其ほとりのけしきみる様なり

此体にて能々分別すへし当流の付やうハ広クしてつまらず右之外如何様も付寄可有前句の馬萩などに目を付て付るハ枝也只一句の心をひつからげて心に味ひ其所に何にてもさ」(4ウ)も有へき物をあんし出し我心にて作りて付ルなれハ定りたる付合の道具おほえて益なしとハ爰の所也此後いか様に風体替るとも此作意心得たらん人其時の風体／＼に随ふへし」(金)

○付味三句めはなるゝ事

哥仙首尾十二句の自注にてな」(5オ) そらへ知るべし首尾とハ哥仙の面六句ニ又うら六句するなり百韻の首尾ハ面八句うら八句也月おもてニ一花うらニ一也

八月十五夜去方にて各々即興之首尾

大方ハ夜半に戻る月見哉

月見る人大方夜中が帰ると也」(5ウ) 我ハ残り居て見あかぬといふ心有

大方ハ月をもめてし是ぞ此

つもれハ人の老となるもの此哥あれハ大方といふ五文字月の発句に相応也さのミ此哥をしたるといふにハあらず

鳥  
傘借ルまでハあらぬ霧雨

月見る比霧雨はらくと降」(又5オ) たるにて大方もどりたる心也頓而はれぬべきをまたすして帰る人哉といふ心にて発句の下心まで通ひたり

第三  
分尽す花野の末に里有て

此第三あしく候先誹言なし発句の心にもとる輪廻有月見に行て雨にあひ笠かるも」(又5ウ) 秋の野の草花見に行て其里辺にて笠かるも夜るひるに替りたる分にて心ハ同じ事也又はなれて付る第三ハ

第三  
ひや／＼と風おもしろき酒氣にて

同  
秋の江は舟の乗場に間ちかくて」(又6オ)

此類打越ニかまハすして付たる第三なるへし

荷を持たなから舟をよふ人

付心あらハ也野つゝきの渡し舟のほとりにむかひの里も見ゆ

べき景氣也

市小屋は薙たゝみて暮さひし

市人売初を仕まふて荷」(又6ウ) など持帰る時里の舟なとよふ景氣也

○され共此句も打越の氣味あしく候市小屋居所ニハあらねと

打越の里けしきも此句ノ心も同じ事也又はなれて付んなら

ハ

○鷹の鈴聞ねハたらぬ村千鳥」(又7オ)

惣而鶴鴈鴨類鷹匠のけしきならずして里人荷持人などハおそれぬ物也付心聞へたり打越もはなれ申候此体ニ而打越の氣味分別可有事也

産落するにやすき犬の子

付心あらハ也注に不及」(又7ウ)

なま智恵のありて浮世の物案シ

此付様ハ心付也犬のやす／＼子をうむを見て世上の人の上をおもふ也人ハなま智恵ありて物をあんずるによつて大事も不也此あんするを子をうむ事斗ニあらす惣別の物案シと一句立

也」(又8オ) 前句をかる気味なし  
雛の殿のわるき顔つき

前句なま知恵をおさなき娘のなま心にして付たりひいな遊び  
に殿のかほあしきに付てわれもいか様の夫をか持んなとあ  
したるさま也伊勢物かたりに世心つける女」(又8ウ) など  
有もかゝるたくひと也

人の身の花をいひけす口くせに

爰ハ六ヶ敷付所也人の事をそねみいひけす口くせにて心もな  
き雛の顔まで難をいふと也口くせといふくせの字にて付たり  
読出す恋の哥へうらゝか」(又9オ)

人の花をいひけすなとハ只口くせにてこそあれ心はよけれハ  
こそよミ出す哥ハすなを也といふ心也哥ハのハの字にて付た  
りうらゝか長閑なと春ノ季につかふ其句の約に立やうにつか  
ふべし爰にてすなをなる心に」(又9ウ) 用ひてつかふ也大  
かた季のやとい斗にする事無念也

打つけに鎧甲のこはくし

打つけとハ其まゝ見たる所也打つけに物そかなしきなと古  
哥にも読り皆其心也見たる所こハくしき武士なれ共読出す  
哥は」(又10オ) やさしきと也

兄や法師や方丈の椽

是ハ大寺の気色也落武者にても軍将なと和尚に対面無事有

ましき事ならず児法師やわらかにてこハくしくおもふへし

### ○面八句の事

」(又10ウ)

発句の事昔ハ秀句にいひかけ手をこめてするを専とせり今ハ景氣にて  
する也たとへハ前句付を前句と付句とひとつにしたる体成へし其句の  
内にさも有へき景氣あらハ当風の発句也

### ○発句切字之事

やそ哉 けり たり めり つ なそ。 いさ いつれ いか  
けらし」(又11オ) ぬらん いかて いく たれ。 を。 もなし 何  
む(行米 なんかん) など一字はね也 し し文字現在未来ハ切字過去ハ切字ニ  
ならず 現在のしハ(昔し遊しひろしう れしかなじなど) 過去のしハ(昔かりし遊かりし見たし 未来のしハ(雨に成へし雲に) (ならじ花咲へし)

かやうにへしとじとにござる」(又11ウ) か也現在ハ当分さし  
あたる所過去過たる事をいふ心未来ハまた来ぬ所おもひやる  
心皆文字心にて分別可有候他ハ是になぞらへて知るへし

ぬ(ふのぬハ切字ニなら すおはんぬハ切字也) ふのぬ(また夜ハあけぬ花 さかぬ鳥なかなぬ) おはんぬ(はや夜ハあけぬ 花さきぬ鳥なき)  
ぬ」(又12オ)

此心にて見わけらるへし

此外下知切レといふ分

ふけ なけ ひらけ ふくな なくな せよ させ まて かすめ

此類人の人に物をいひつくる下知のことか或ハ花草木鳥けた  
もの其外景物の物に人のことかいふ下知の心也皆切字也

其外切字色々又ハ哉といふにもいく色も」(又12ウ) 有やもしにも七ツの品あれとも先あらまし如此おほくてよし次第／＼に功者ニ成程師ニ問ひても口伝のてにハの書を見てひとりがてんの行物也(註2)

○景氣を見立たる発句

白妙やうこけハ見ゆる雪の人

江戸  
一品

塔三重花に植たる山辺哉

信徳

池の魚の桜おハゆる嵐哉

霞時／＼あまる帆かけ松

我黒」(6オ)

○手をこめたる発句

駕籠かりて淡路にのらん塩干哉

如泉

雪の里男かせよむ夕へ哉

和及

稻妻や二本迄よむ小松原

和及

蝶咲て昼顔ねむる垣根哉

有体にいひてをのつから風情おもしろき発句 「(6ウ)

古ル池や蛙飛込む水の音

江戸  
芭蕉

名の付ぬ所かわゆし山桜

湖春

花さけと鳴るハ若衆の鼓哉

江戸  
才丸

三吉野ハ何桜共見へさりけり

和及

此類ハ上手名人の上にもすくなし此格初心のうちに好むべからず能句ハまれなり」(7オ) 右二品の体を心かけてすべし

一 脇 古流ハ連哥のごとく体さま／＼習有れとも今ハ大概発句景氣

なれハ又景氣にてあしらひてよしてにハにて留ル事嫌らひけれとも頃ハ宗匠衆もゆるす事なれハてにハとめもすべし同じくハ韵字とめ可然か」(7ウ) 季の時節をたかへぬ様にすべし

一 第三 てとめよし若て文字折合ならハらんとめもなしとめにとめ

其外ハせぬがよし同季の内脇迄ハ同じ時節にして第三ニハハたつへし発句立春の発句ならハ脇ハ正月の部第三ハ弥生の心よし又三月に渡る物」(8オ) をすへし春ならハ霞長閑うら／＼などの類正月ハ三月迄用る物也夏秋冬ニも類多し扱付心ハうすく共一句のたけたかくおも／＼敷する也是古代ハの法也韵字とめなどの第三上手の上にする事あれとも初心のうち中の位迄せぬがよし」(8ウ) 只／＼てとめらんとめ二ツのうちならてせぬ物と心得べきか

一 四句め 古代ハ四句めふりとてかる／＼とする法也付前ハうすくとも一句すら／＼としてけりとめなりとめ可然候其外何にても

一 五句六句め さのミ子細なし只おもてのうちにしくれたらぬやうにさら」(9オ) くとすべし

一 七句め 発句脇第三迄月なくハ此所月の常座也秋の月可然又ハ他の季の月もくるしからず

一 八句め 七句めまで月ならぬさしあひあれハ爰に月するもありこはれ月といふ也同じくハせぬがよし



古人の名 同名字 同字 神祇ニ而も 忠実須大黒ハ福神故  
 ゆるする也 又発句ニ神祇尺教恋名所等ならハ縁ニもすへし

も秋の季成ともする所なり」(10才) ゆへハ花々前に秋の句  
月むすひて三句するため也それより前に月出したらハよし花  
によひ出し花引上花あり引上花ハうら十三句より前に能前  
句有時花の句をしてしまふを引上といふ又よひ出し花とハ前

二の表十三句めを月の座也前ニなすれハよし」(11才)

三のうら十四句 右同前

一 名残ナノコリのうら八句 月ハせぬ也七句め花の定座也勾ニホヒひの花とて別し

て賞翫シヨウクワンの花也上ケ句クにハ其席アイサンの挨拶アイサンを目出度やうにする也に

ほひの花の匂ふ其心持をすへし」(11ウ)

○哥仙の仕様

一 哥仙誹諾といふ事フモテ面六句うら十二句名残おもて十二句うら六句に

て以上三十六句也月花の座うら十一句め花面五句め月の定座  
 へうら六句に八月せす百韻の名残ノうらと同前（12オ）い  
 しへ連哥に哥仙の読人の名を三十六人句ともに立て仕立

翻刻・当流増補番匠童

○四十四ノ仕様

一 四十四誹諧といふハ百韻之法(イフ)(12ウ)を初折と名残のうらと二三折にして二三の折をぬきたる分也百韻の法にあり

○恋の詞

恋(恋の山。恋の淵。恋の海。恋衣。恋心。あた恋。浮恋。恋の重荷。恋草)

思(浮おもひ。物おもひ。我思ひ。深き思ひ。思ひ川。思ひの淵。思ひの山)(13)

泪（海川。泪の淵。泪の海。泪の雨。袖泪。袖の露。袖の海。袖の波。泪の渾み。袖しほる。など皆泪也）

（薄ッス情。浅ッス情。  
なけの情。深ッカキ情）

傾城（白拍子。遊女。遊君。な  
なかれの君。うかれ女。た  
なかれの女）

此分異名イ今ハせぬトモチかちなれ共所ニトモチ句ニよりすべし」(13ウ) 揚屋アケヤ。く

るわ。色里。色町。島原。吉原ゲイセイちもり。泥町ドロ。栗座トリス。新町。木辻キツ。鳴川ナガハ。

長崎の丸山 此分きこへたる傾城町の名所皆恋也室はかたとも下の関な

と此外けいせい町有所なれども打まかせて窓にならす毎体に寄へし身  
 あり。文目しんそり水あざ毛カラやの手寸さへ。すい寸たは三

な<sup>ナ</sup>け<sup>ケ</sup>筈<sup>ハズ</sup>。忍<sup>シノ</sup>ひあ<sup>ア</sup>ミ<sup>ミ</sup>筈<sup>ハズ</sup>。か<sup>カ</sup>しあ<sup>ア</sup>ミ<sup>ミ</sup>筈<sup>ハズ</sup>。(14才) 雫<sup>シヅ</sup>あ<sup>ア</sup>ミ<sup>ミ</sup>筈<sup>ハズ</sup> 其外世にみ<sup>ミ</sup>な<sup>ナ</sup>れた

る皮町の詞皆恋に成べし

野郎ヤラウ（哥カ舞フ妓キ子コ。売ウリ若ワカ衆シウ。川竹入若衆）  
かけま。飛ト子。なと云んハ好ましからす

ワカシウ  
若衆  
（寺若衆。町若衆）

娘ムスメ

幼少の心有ハ恋にならず  
(やさ娘品シテ娘伊達テ娘など)

婿入ユメムコ 婿入ムコ  
(嫁と斗ムコ 婿とはかり  
恋に成かたし)(14ウ)

女  
(とばかりも  
恋に成かた)

しやさ女 たて女なと色  
を付けて恋也 髪カミ切女  
妾 テカケ  
シヤウ  
(めかけ 思ひ人 若ワカ後コ家ケ)  
夢 ユメ  
(夢の錦 夢たのむ  
あたま 浮き夢  
夢)

句に寄て恋  
にならず

留伽羅 トメキヤラ  
(袖のうつり香  
とめ香 枕香炉)

枕ならふる マクラ  
(二つ枕 かはす枕。長枕  
新ニ枕 マクラ)(15才)

別れ<sup>ワカレ</sup> 衣<sup>ヌエ</sup>く むつ言<sup>コト</sup> かね言<sup>コト</sup> さゝめ言<sup>コト</sup> 文玉章<sup>フメタマウサ</sup> (かな文<sup>後コ</sup>朝<sup>前</sup>の文<sup>前</sup>！) ひ

とり寝 思ひね 門立 カトタチ 袖引 ソデヒク 契り チヤ  
 (契りの末。浮ウヤちきり。あたちきり。ちきり置。いはぬちきり。浅アヤちきり。約サ)

東ソク  
伊達（たて衆たて人）  
（たしなミ）  
（15ウ）  
人目  
人目の関セキ  
人目しのふ  
人目思



化野（無常の境へかへぬ世に） 死の沙汰 人焼場 腹切 自害

かやうの噂（うわさ） 皆哀傷也心ニてなる句有恋哀傷両役の句おゝし其句／＼に心を付て了箇すべし

○去嫌の事

二句去り 人倫 名所 木ト竹 草ト木 かくのこトく高キトひくき

トかわりたる植物二句也（23才） けだ物と虫如此かへりたる生類二句去也鳥魚朝時分と夕時分二句也月日星替りて天象の間二句也

○三句去り

山類 水辺 生類（けたものとくむしとむし） 神祇 尺教 恋 無常 居所（23ウ） 同字 旅体 夜分 時分（タとタ） 風と風 衣類と

く 雲と雲（植物とく草とく木とく）

○五句去り

月 松 舟 夢 枕 竹 衣 涙 煙 田 同季（24才）

○人倫

雲上人 殿上人 武士（侍者） 下部（馬かたはんた） 僧（名僧）  
高僧（尼比丘尼） 儒者（文者） 醫師（醫師） 農人（農人）  
山伏（さんぶき） 商人（町人） 識人（24ウ） 猿（さる）  
（かりやうし） 翁（おきな） 松頭（か） 座頭（ざ） 家のあるじ（花のあるじ）  
（まはし役者） 盗賊（ばくちうち） 海盜（かい）

右人の体の内身と云詞人倫也

○非人倫ニ分（25才）

翻刻・当流増補番匠

奉行（目付） 目代 勢揃（大勢） 俗（老） 順礼 人形  
（おしや） かしや かなやうにや もうもく（おし） 酒にゑひ（酒のとすれ） 大工  
（月花をあるじ） 六親（公家）

○居所の体の分（25ウ）

家（門） 戸 壁 天井 窓 瓦 城（築イ地） 座敷（榻）  
（か） 戸 壁 天井 窓 瓦 城（築イ地） 座敷（榻）  
（か） 戸 壁 天井 窓 瓦 城（築イ地） 座敷（榻）

居所用の分

庭（坪の内） 外面 簾 畳 垂布

山類体の分（26才）

山（坂） 谷 尾 尾上 尾下 高（高）

同用の分

滝 炭竈 梯 柚木

山類の分

山に有閑（あふ坂の閑） 足（橋） 山鳥の類（小鳥） 山梨の類（山人）  
（山） 山鳥の類（小鳥） 山梨の類（山人）

非山類分

島（島） 川（川） 春日野 山川（立川） 山（山）  
（島） 川（川） 春日野 山川（立川） 山（山）

水辺体の分

海（海） 川（川） 池（池） 井（井）  
（海） 川（川） 池（池） 井（井）

水（清水）  
淡アス  
闊伽ア★  
塩シホ（うしを）  
波ナミ  
氷コホリ（氷室）

水辺体用之分」(28才)

船（筏イカダ）  
浮木ウキ  
浮桶ウキバケ  
塩屋シホヤ  
流ナカレ  
蛙カワツ  
慊燒  
水辺  
魚イサ  
網アミ  
釣瓶

下桶 釣垂 海人 蛸壺 藻ウヰクサの類 和布ハカメの類

水辺の分

住吉神 浦ウラに有関 明石アカシ〔28ウ〕須广スワ 清見寺 上島（小島松島） 橋姫ハシメ

志賀の松 御萩 つらゝ 田井 月の出しほ 難波津 三輪ヶ崎 (松か)

崎

非水辺分

天浮橋アマノウキハシ  
 横川ヨコカハ  
 苗代ナシロ  
 難波寺ナニハシ

志賀 住吉 スミヨシ 大井 須廣 スマヒロ の三竜 明石 アカシ の岡 オカ 松浦 マツウラ 姫 ヒメ あわずが原 自

川の関セキ  
軒の玉水ノキ  
（月の水。硯スミ・りの水。）  
布さらす  
室の八島ムロ  
霞の海ヤシロ  
（詞・カスミ）

（の海）  
 菅屋 トウ  
 小田 カケハシ  
 の梯  
 鳴（29ウ）  
 菅 スケ  
 左野 サノ  
 の渡り ワタ

夜分の詞

暮クレテ  
(暮はてし  
あけくれ)  
明アケぼの  
(あけかた  
ありあけ  
あかつき  
残る  
よこ雲  
露ふけて)  
別の鳥ワカレ  
(別の)  
灯トモシヒ  
(さい)

り火。かやり火。ほたる火。らうそく  
うつミ火。むさしひ。さつね火。花火  
床<sup>トコ</sup>（ねや。ふとん。ふすま。  
きぬく。下廻。かや。枕  
かば）  
寝<sup>ネ</sup>（まどろむ（オ）ふす。又（30

殺<sup>ころ</sup>す。うた<sup>うた</sup>ね。との<sup>との</sup>  
い<sup>い</sup>び<sup>び</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>。む<sup>む</sup>つ<sup>つ</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>  
草<sup>クサ</sup>  
薤<sup>ムシロ</sup>  
(す<sup>す</sup>が<sup>が</sup>け<sup>け</sup>む<sup>む</sup>し<sup>し</sup>ろ<sup>ろ</sup>。)  
庭<sup>ニハ</sup>鳥<sup>トリ</sup>  
(ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>ろ<sup>ろ</sup>う<sup>う</sup>)  
よい<sup>よい</sup>闇<sup>ヤミ</sup>  
いな<sup>いな</sup>

妻ツマ  
日待ヒマテ  
（神楽）  
七夕タナバタ  
夜ふくる  
（さよふけ）  
かさしの錦ニシキ  
鰯舟ウナボイ  
（夜舟）  
」

(30ウ)

詼諧手斧屑

四季之詞

○春  
蒼天  
東君  
詔光

正月（むつき）  
初空月（はつそらつき）  
かすみそめ月（かすみそめつき）  
太郎月（たろうつき）

元日  
(はけさの着目)

のはしめ  
の年頭  
のつのはじめ  
の三  
の三  
の改  
の年

○四方拝シヨウハツイ（星をとらふほしをとけ）  
○元正ゲンセイのとらの時ときすへら

「**きん**」**（四季1才）**  
星シャウをとなへ天地四方  
の山陵を押し玉ふなり

○齒固  
（もちゐかゝみ  
ゆつりは  
うらしろ

○屠蘇トリソ  
白散二日 一度ト瘰シヤウ散三日  
(り子 小女ニはしめてのましむるなり)

○朝賀テウガ  
(朝拜・奏賀・奏瑞・群臣の拜の事也)

○元日セチエ節会米ヒノ様タノシ（腹ヘチ赤カ）國ク柄スノ奏（國柄笛）  
國柄ノ翁 諸シ司奏ソウ 七曜ヨウ御ミノ曆リヤタ

○祇園キワけつりかけの神カミ

○毘沙門ヒシヤモンのくときキヤウ経キヤウ（俳）  
○若ふひすニハフヒス（俳）  
○門松カドマツ（俳）

（たて松かさり竹おほかさりわ）  
 ○若水ワカミツ（つゞみ井ひら）  
 ○おほぶく（作）  
 ○蓬（作）

ライ  
菜かさる（俳にしかな俳かす）  
○たはらご（俳生ナ海を云り）  
○押鮎（土佐日記ニアリ）

○庭かまど(ニハ)  
○ふくわらを敷(シク)  
○毬打(キウダウ)  
○襦(ユ)きさらやう(ヤウ)同(トウ)玉(タマ)○万(マン)葉(エフ)

に玉きへる  
と云是なり

○はねつく（俳  
作）  
やりはこ同  
胡<sup>ゴ</sup>鬼<sup>キ</sup>板<sup>イ</sup>同  
胡<sup>ゴ</sup>鬼<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>子<sup>コ</sup>  
はこいた

破魔弓（俳  
作）  
破魔矢

(同) はうびき (同) 弓はじめ (同) 馬のりそめ (飛馬はしめ同) きそはしめ

（同きぬきそむ）  
初鳥ハツトリ（元日の朝の鶏）  
初夢ハツユメ  
去年コゾ  
今年コトシ（ふるとし。よひの年）  
（2ウ）俳 若き年

曆ひらき (作)  
 松はやし (作)  
 はる駒 (作)  
 万歳楽 (同 踏哥節のまねと  
 いへり花鳥余情)

鳥追トリフビ（同）  
松さがり（同元日の雨を俗にひならハセリ）  
いねつむ（同）  
いねあくる（同元三の）

寝ね起おき(俗)  
にいふなり

けさう文売(同)

桃符タウフ  
(桃板<sup>ハシ</sup> 桃梗<sup>カウ</sup> 仙<sup>セン</sup>木<sup>モ</sup> 神<sup>カミ</sup>茶<sup>チャ</sup> 神<sup>カミ</sup>符<sup>フ</sup>)  
もろこしのならハシに桃も、の木の札に神

茶ト附クツ墨ルイの二神を  
かきて門に立るなり

「(3才)

初子日 ハツチノヒ  
子チノ日のおそひ 小松ひく  
子目の松

若菜 ワカナ  
(初わな)  
な

くさな なたな はこへら 芹<sup>セリ</sup> 薺<sup>アナ</sup> こきやう すしろ<sup>す</sup>  
ふな 仏の産<sup>サ</sup> ○ふくわかし ○わかかなはやす 千代水草 若菜也

初寅参<sup>(作)</sup> ふこお

ろし(同上の寅の日  
鞍馬に参る也)  
卯杖ウツエ  
(卯摺チ  
御杖フエ)  
朝勤テウキン  
キヤウカウ行幸(二日なり天子の年始に上皇等  
に母后ヨウの宮へ行幸なる事)

りな  
叙位 デロイ (五日或ハ六日諸「(3ウ)官の年ヲ勞  
ラウを奏シウシ位を次第に叙<sup>デロイ</sup>するなり  
白馬節会 ハクバノセチエ (七日あをむまのせ  
ち御<sup>ヲ</sup>ラン<sup>ヲ</sup>ヨ<sup>ヲ</sup>タ<sup>ヲ</sup>ラシの奏<sup>ヲ</sup>)  
節 ナ

ツエガハノレンシ  
摘河神事（伴七日吉野かつ  
ての明神にあり）

シンコンインノミシヲ  
真言院御修法（八日）

ヒタチワビ カミワサ  
常陸帯の神事（十日常  
の鹿島）

明神の  
祭なり）  
夷祭  
（十日）  
（俳）  
アカタ  
シメタ  
懸召の  
除目  
（十一日より十三日まで也）  
（あかた  
八回舍の  
事なり）  
男  
蹈哥  
（十四  
日）

夜也あらはしりかざし」(4才)の  
わたの女ヲシテ踏哥ハ十六日の夜なり

ソナヒキ  
綱曳(伴)

サキテウ  
三毬打(左サダキ長チヤウ  
吉書あぐる)

シヤウゲン  
上元(三)

日(御薪(十五日) かゆの木(同日) かゆづゑ(女の腰をうつ戯なり) 賭

弓(十八日天子弓(射なり) 厄神まいり(九日) 具足の鏡わり(同日) 内宴

(廿一日仁寿殿) 御忌(廿五日法然上) 福寿(4ウ) ぐさ(餅元日) 東風

氷とくる(氷なるひま) ゐてとくる(餅) 魚氷にのほる(月令) 雪とく

る(雪間) 雪のた支間(雪のし) 木の目 下もえ くたち(花間)

若草(初草) よめかはき(同日) ふきのたう(同日) 梅(草つけ草(5オ) 白ひ

寒梅(数枝等) 柳(目をやき 見草(川そひ草) 鶯(白ひ鳥 金う衣鳥(うの替の替

杜草紙) 佐保姫(三月) 長閑(かともいへり) さえかへる 水ぬるむ

あたゝか(三月) 梅がえうたふ(月柳うたふ) 松の花(5ウ) (りつみと

りたつ十 霞(三月) 水辺にあらず かね霞(夜分にあらず) はぜ(餅飽(煎) 山

板の皮(餅) 野老(同日) 〇百千鳥 春の宮(寒) 霞の洞(春ハル也仙境

院の御所) あまのり(おこのり) 〇二月(きさらぎ 梅見)

初年(初午の日のい) 東福寺ノせんぼう(同日) (6オ) 春日祭(上中申日先未

村使当日(内付) 大原野祭(卯日) 吉野の餅くぼり(二日) 薪の能(七日

十四か) 遺教経(仏涅槃に入玉ハんと) 仏の別(三月) 雪のわかれ(餅) 蛭峨

柱 炬(餅十) 積塔(十六日或石) 朧月夜(〇) 天王寺ノ聖 雲会(廿

日) (6ウ) 應化して鳩となる(月) 蛇穴を出る(餅) 継尾の鷹

(白尾の鷹) 〇日政春(鷹の尾をきみしらすと云白羽(羽)となり) 鳥の巢(鳥の

の啼 雉子 きすへ鳥(鳴き鳥(野鳥)とまりかり こまり山 朝アキ(鷹)カ(春の

燕(同日) 貝鳥(7オ) (鳥上) 帰る鷹 鷹の名残(北へゆく鷹) 雲雀(ひ

餅) ちそ(餅) こま鳥(同日) 蝶(朝(餅) 蜂(餅) 蛇(餅) 蛙(餅)

かへる(同日) いといふ(糸あそ) 猫さかる(餅猫の) 初餅(餅) もろこ

(同日) 飯蛸(餅) しどみ(同日) まて(同日) 田螺(餅) 初雷(7ウ)

焼野(山を焼) すどろの薄 畑やく(畑かへす) 苗代水口祭(苗代に水しかく

立て祭) 種まく〇麻まく うど(餅) くはい(餅) 土筆(餅) 杓

菜(餅) 防風(餅) さる(8オ) たづま(若草を云) 草こうばしき

草のわかは 若紫 蔵 角ぐむ 芦(トモ) たんは(餅つき) 蒔

(同日) 直(川(餅) 海雲(餅) 紙鳥(餅) (餅) 〇三月(弥生 花見月 桜月)

巳の日のらは(上巳 水辺にてはらへして) (8ウ) 曲水の宴 桃花の節(桃

酒餅 草餅(餅) へとり合せ(餅) 薬師寺の最勝会(七日天(天皇

同〇桃花生王(同) 柳葉(餅) 寒食(餅) 土佐の海硯石取(9オ) (餅三也)

石山祭(餅) 栗津祭(餅) 水尾祭(餅) やすらひ花(餅) 比

良祭(餅十) 壬生念仏(餅十四日より) 嵯峨の大念仏(餅十五) 千本念仏

(餅十) 浅草祭(餅十八日) 御身拭(餅十九日) 御影供(餅廿日) 夏近

稲荷の御出(9ウ) (餅の日也) 順の空入(餅大業也) 永き日(餅) 時鳥の巢

(餅) 暮の春(餅) 春の限(餅) 春の名 戸をふさく(餅) 時鳥の巢

よぶこ鳥 雲に入鳥 かへる鳥 麦鵲(餅) のほり築 桜貝

桜魚 桜鯛 わかめ 若鮎(餅) (餅十オ) 桑子(餅) 新桑摘

桃(餅) 山桜(餅) 花の錦 花の雲 花の雪 花の滝

花の波 花の鈴(餅) 花鳥(餅) 花車(餅) 花車

五五

花の宴 梨の花(山なしの花おふなり) 海棠(ふらな花) 10

ウ 辛夷(四手こし) 躑躅 山吹(花ナリヒ) 木瓜の花(伴) 沈丁花

(同) 木蓮花(同) 石南花(同) 蕪方の花(同) 小米花(同) こでま

り (同) 庭桜(あらす) 馬酔木花(伴) 杏子の花(同) 橘花(同) 柿の

たう(柿の) 楊梅の花(同) 棗花(同) 11オ 藤(藤なみ藤) 菫(はつ

れすみ 茅花(伴) 枸杞(伴) はふこ草(同) 新茶(同かき茶茶つ同) う

こぎ(伴) なもみ(同) あづま菊(同) かうらい菊(同) 桜草(同)

七重花 馬蘭(同成) 糸びね(同) 金鳳花(同) けまん(同) 丁子の

花(同) 眉作の花(同男ナリ) いた(11ウ) どり(同) ミやうが竹

(同) あさつき(同) ぜんまい(同) さくら花(表白紫紫花ナリ) 山吹

衣(表紫紫ナリ) つまじ衣(表紫紫ナリ)

○夏(朱明) 四月(卯月 卯の花月 孟夏)

更衣(同) 白重(更衣に御殿) 12オ あはせ(伴) 筑麻祭

(初日成ハ) 稲荷祭(初の日) 山科祭(上巳) 松尾祭(四の) 当麻祭

(上の申) 灌仏(八日仏生会 灌花) 日吉祭(中の申) 賀茂祭(西の) 千団

子(伴十六日也) 嵯峨祭(伴中) 榊(孟夏の天) 麦の秋風(12

ウ) 麦秋(伴) 青麦(伴茶) ふか見草(甘草 名取草 富貴草 よろ) 芍薬

(あひす草) 杜若(よ花) 葵草(三葉草 葵かづら) からあふひ 一八(伴) 射

干(同) 薔薇(同) 罌粟花(同) 岩藤(同) おとり花(同) 茶引草

(同) 卵の花 若楓 若葉 若葉の花(紅葉の) 13オ わくら葉

茂る(草) 夏木立(新樹 新緑) 桐の花(伴) 美人草(伴花ナリ) 柑類のは

な(伴) 枳殼の花(詩ニハ春) てまりの花(同) 風ぐるま(同) れたま

(同) はくてう花(同) 山昔の花(同) 厚朴の花(同) 藪椿(同)

櫻櫛の花(同) 桜の実(同) 竹の(13ウ) 子(たかんな) すゝの子

(伴) 岩梨(同) 落(同) 蓼(同) 蓮の若根(同) 郭公(四手の田をさむ)

かんこ鳥(伴) ばん鳥(同) 葭原雀(同きやう) 蝙蝠(同) 鹿の袋角

(同) とや照(伴) 飯餅(伴) 拝振虫(伴) 蚊(蚊) 蚊帳(伴) 卵の

花衣 短夜(明やす) 夏入(花) 14オ いちこの類 棒ふり虫(伴)

○五月(さつき 月見す月) 賀茂の足揃(伴あらず) 松本祭(一日) あやめふく(同) 内膳司供

早瓜(山崎の御園より) 菖蒲(刀さうふ) 薬玉(くすりの玉 さつきの玉 長命草)

終つて命イ(終つて命イ) 14ウ 薬日(五月を) 薬草摘(百々草ナリ) 艾人

(蒲イ虎) 粉団を射る(唐セコシ) 百草をたゝかハす 住吉の御田種(伴

廿日) 賀茂の競馬 蟬の初声 鶯音を入(月令) 真こもかる(つき) 藻

の花 藻をかる(藻刈) めを刈 萍の花 百合(はかり かのこゆり) 15

オ) 柘榴の花 ついり花 むはらの花 さるとりの花 紫陽草(四ひら

末摘花(花也) 忘れ草の花(草ナリ) 下野の花(同) 石菖(同) 金

銀花(すいか) 蕙楊の花(せんたんの) 天蓼(伴) かたはみの花(同)

早松(同) あかざ(同) 菟(同) 15ウ 茄子(同) 浅瓜(白瓜) 榊の花

かりぎ(同) 南天の花(同) さつき躑躅(同) 生胡桃(同) 榊の花

(同) 橘(よ花) 山梔の花 青梅(伴) 杏子(同) 枇杷(同) 青

山椒(同) 若竹(今年) 早乙女 早苗 青田 田草(伴) 粟まく(伴

へ五月也刈へ八月なり) 萩(伴) 萩(伴) 16オ 螢(螢イ火) 蚊遣火

五七

(草餅) 葛葛 (葛の根を)  
草の色付 (22才) 花壇 (餅) 野菊 (餅)  
鶏頭花 (同葉) 金剛草 (同) かまつかの花 (同) 鷹来紅 (餅) こ

なぎ (餅) うつら草 (同) 荷藤 (同) 穂蓼 (同) 茴香の実 (同)  
からす瓜 (同) 芋 (いものくさ) かりやす (同) 菜ほる (餅) 木綿取 (同)

く わかたはこ (同) 鬼灯 (紅は) (22ウ) 菜種まく (同大根たねがらし  
ひき) 衣うつ (衣まき四手うつ) 鶉 (片うつら羽まき衣) 鴨 (焼鴨 ほととぎす 鴨の羽も同じ)

燕帰る 稲負鳥 鷹 小鳥渡る (餅) 色鳥 (ひよ鳥 せきり 山から  
日白の類) 鶇 (すのはやにへ) 小鷹 (小鷹 つかみ) 鷹打。かじか (23才)

さびあゆ (餅) 下り築 (餅) 鹿 (鹿 鹿) 鱧つる (餅) 小鰯引  
(餅) 野分 (八月二吹) 初塩 初鮭 (餅) 江鮭 (同) 田を守 (田色つく)

稲葉 (餅) 落穂 (餅) 稲延 案山子 (鳥) そりづ 引板 な  
るこ (かけて水の力をそふるなり) (23ウ)

○九月 (なが月 紅葉月 小田月 秋)  
泉涌寺舍利会 (八) 重陽宴 (菊花 あにめ酒 菊のきせ種) 醍醐祭 (九日餅)

鞍馬祭 (九) 貴布称祭 (同) 生玉祭 (大坂) 四宮祭 (大津) 住吉の市  
(十三日 宝の) 後の名月 (豆名月 餅 栗名月 日 月の名残) 粟田口祭 (24才) (餅)

神田明神祭 (二十五日) 岡崎祭 (餅) 呉眼祭 (十八日あやは祭 八十七  
幡花の頭 (廿) 城南寺祭 (餅) 野の宮の別撰 虫 (殿上人さか野に遊て虫籠)

雀 蛤となる (餅) 菊 (共に秋なり) 豺 獣を祭る (餅) 紅葉 (つる草 時か  
両端をむすひ) (24ウ) 梅紅葉 (紅葉 紅葉) 名木散 (落葉に色を結

柞 檀。檀 (正木のくつら) 楓 (ひても) 色かへぬ松 万木実 銀  
杏 (餅) 椎 (餅) 柿 (餅) 蕈 (同) 櫟 (同) 蜜柑 (同) 金柑 (同)

九年母 (同) 柚 (同柚べし) 雲州橋 (同) 仏手柑 (同) まるめろ (25  
オ) (同) 柘榴 (同) 榧 (同) 胡桃 (同) 梨 (同生梨の油し 梨軒 榎の

実 (同) 榎の実 (同) 榲桲 (同) 団栗 (同) ひよん (同) 松子 (同)  
棕の実 (同) さいかし (同) きこく (同) せんだんの実 (同) 梅の実

(同) たもの実 (南天の実) 梅もどき (同) ミつ木 (山水) (25  
ウ) 野山の色 野山の錦 うら枯 仙蓼 (餅) 芦の穂 (餅) 薄ち

忍ふ草 思ひ草 (餅) えやみ草 (餅) われもかうと  
ろゝの花 (餅紙すきの) 老母草 (同) 菟豆 (同) ふんどう (同) まめひ

く (同) 茸狩 (餅) 遅稲 (餅) 新酒 (餅) 紅葉鮭 (同)  
松露 (餅) 遅稲 (餅) 新酒 (餅) 紅葉鮭 (同)

尾越の鴨 (同) 網代打 露霜 (餅) 肌さむき 潮寒 夜寒 (餅) 冬近 (餅)  
朝寒 うそ寒 (餅) 冷し 新綿 (餅) 秋深き 冬近 (餅)

き 冬をまつ 長き夜 秋より後 くれの秋 ゆく秋 九月尽 (餅)  
住吉の神送 (餅) 冬 (餅) 新綿 (餅) 秋深き 冬近 (餅)

○冬 (元美雅 上天 玄)  
神送 (餅) 残菊宴 (餅) 遠磨忌 (餅) 十夜の  
念仏 (五日より十) 惠美酒講 (餅) 下元 (餅) 開山忌 (餅)

大社の神事 神の留守 神むかへ (餅) 炬燵 (餅) 初時雨 (餅) 柳かるゝ  
火桶餅 (餅) 茶の口切 (餅) 初時雨 (餅) 柳かるゝ

冬木の桜 枯野 (餅) 薄かるゝ (餅) 菊枯 (餅) 葛枯 (餅)  
冬木の桜 枯野 (餅) 薄かるゝ (餅) 菊枯 (餅) 葛枯 (餅)

冬木の桜 枯野 (餅) 薄かるゝ (餅) 菊枯 (餅) 葛枯 (餅)  
冬木の桜 枯野 (餅) 薄かるゝ (餅) 菊枯 (餅) 葛枯 (餅)



茶の花(俳) 枇杷の花(同) 山茶花(同二十四番花小寒) かへり

花(同) つはの花(同) 冬牡丹(同) 八手の花(同) 寒菊

蕎麦刈(八月也) 荃菜(同) 燕引(同) 麦まく(同) 初雪 初

氷(同) 鐘氷(同) さゆる(月) 寒き(夜) 網代(あじろ守) 氷魚

千鳥 ふしつけ(魚をとるために水中) 水鳥(の鳥) 鴛鴦(あちむらた)

夜興引(犬をつれて山に入て) 鯉(俳) 生海蜃(同) 櫓(同) 炭竈(炭)

子(俳) 蒲団(同) 頭巾(同) たんほ(同) 液雨(立冬の後十日入夜) 雪

垣(俳) 〇十一月(霜月 神楽) 雪

宮線(唐の宮中紅糸すらにて日影をはかるに) 山科祭(上日) 平野祭(中上)

日 春日祭(同) 当麻祭(同) 大原野祭(中) 吉田祭(日中) 日吉

祭(同日右是等祭を別にもあ) 豊明節会(中) 里神楽 日蔭の糸

燎(かぐらの曲) 神楽哥(神あそ) 御火焼(俳) 子祭(同) 吹草祭(同)

空也忌(同) 鉢叩(同) 大師講(同) 御祭(廿七日) 三島の酉市

雪(六の花はたれ雪か) 雪吹(玉) 霞(玉) こゆる(俳)

つら(水柱 垂る水) めて(俳) 氷(うすの氷 氷水) 冬至

梅 水仙花(金盞) 葱(深根) 狩(狩場の雄の鳥) 鷹(鷹狩 あかけの鷹)

鳥さけひ 鳥立をしたふ をしへ草 暖鳥 とりのおち草

力草(俳) 鷹匠(鳥通) 鯨つく(くじら) 初鰯(同) 鮓(同) 鮓(同)

石花(同) ひ(同) あかどり(同) つめたき(同) 雪香

〇十二月(霜月 春待月) 乙子の朔日 御仏名(十九) かげけ綿(31オ) 御髪上(平)

荷前の使(十三日ふるき常后などの段) 内侍所の神楽(大晦日 天子内侍)

和布刈の神事 大徳寺開山忌(廿三) 斎宮の絵馬(大晦日の夜伊勢斎宮の里人)

追儺(四日おにあひなや) 節分 五条天神参(俳) 鶏(31ウ) まめ

うつ 宝船 ひらぎさす(やく) 鶏(31ウ) まめ

網貫(俳冬は) そりにのる(北國の雪中に飛もの也) 櫓(これも雪の上)

顔見せ(寄舞妓の役者) 髪置

乙子の朔日 御仏名(十九) かげけ綿(31オ) 御髪上(平)

荷前の使(十三日ふるき常后などの段) 内侍所の神楽(大晦日 天子内侍)

和布刈の神事 大徳寺開山忌(廿三) 斎宮の絵馬(大晦日の夜伊勢斎宮の里人)

追儺(四日おにあひなや) 節分 五条天神参(俳) 鶏(31ウ) まめ

うつ 宝船 ひらぎさす(やく) 鶏(31ウ) まめ

ひ初る(同) 小つごもり(大晦日の) 春を隣 春をまつ 春ちかき 正

月の事故 札おさめ(俳) 年木(同) 寒声 寒作酒(同) 節季候(同) うば

餅つき(同) 寒垢離(同) 寒声 寒作酒(同) 節季候(同) うば

子酒(同) 河豚汁(同) 菜喰(同) 寒喰(同) 年ごもり(同)

年わすれ(同) 暦の末(同) 早梅 寒梅(同) 臘梅(同) 早ざき

梅(俳) 孟宗竹(寒竹冬) 元禄四 辛 未年三月日

洛陽書林 新井弥兵衛版(32ウ)

誹諧さしあひ去り嫌ハさのミ吟味に心を尽すべからす右に印ス二句

物三句物五句物迄有増覚へてよし其外遠きハ初心の時無用也ゆへハ点

取などせば点者ハ非言有席に望めハ其座の宗匠功者の吟味するなれハ

次第く覚るもの也只々付心前句へのうつりヲ専ニ心がくべし如何

に当流の付心遠く付ルとていかにもく前句に付寄る(33オ) つりなき

句。中の作者までに多し是当流誹諧の疵也二三句前の句にてもどこへ

付ても知れぬ様成句無念也付心ハ遠くする共能下心通ひて其前句を取  
はなしてハならぬやうにしてこそおもしろけれさりながら初心のうち  
ハ其差別なくとも少シのえんあらバ何にてもすへし次第／＼に座を重  
功をつミて其心を得へしと也」(33ウ)

(注1)

A元禄二年版本(初版)では五丁オは、以下の如くである。なお(図5-1)参照。

「も有べき物をあんじ出し我心にて作りて付ルなれハ、定りたる付合の道具覚へて益なしと  
ハ愛の所也此後如何様に風体かハるとも其時々随ふとも此作意を心得たらん人何様  
に替るとも本ひとつハ替り有べからず」

(注2)

A元禄二年版本(初版)では、五丁ウ・六丁オの「発句切字の事」は、以下の如く、き  
わめて簡略である。なお(図6-1)参照。

「○発句切字の事

やそ哉けりたりめりしじきぬつむかなそいさいつれい  
かにこそいかてなといくさそたれをもしめ何せまでふけこほ  
れ思ふなかすめみよふくな月になけ」